

青

私は青だった。

初めてヘッドホンのイヤーパードがしつくりくる

冷たい寝起きの昼があつて。

音楽が弾み淡い光に照らされる

カーテンが閉め切られた部屋があつて。

まだ黄色でいることができた。

私は青だった。

青であることに気づいた。

家族が青だから青になってしまふのだろうと考えている。

友はそのまた別の友の一人について

その人の好きだという青が自分は嫌いだと書いていた。

だからその人と仲良くなれたのかもとも。

私は急に青が好きだった気がしてきた。

それは私のことではないかも知れなかった。

けれど、好きな色について私は「青」と答えたような気がした。

青にはなりたくないと思った。

色を変えたいと思った。

私がふざけることをやめても

私は変わらない気がした。

懐かしさを感じるようになって

それはずつと変わらない私である気がした。

黄色はテニスの色だと思っていたときと

ピンクは女っぽい感じがして嫌いだったときと。

青になることを頑張つてこらえていた。

どういうふうに動いたら青になるのかを考えて

青になることを抑えていた。

けれどふと歩き出したとき

それはすでに偽装された青だった。

私は青になることを避けられなかった。

青はもう私ではない気がしていたのに

私は青だった。

